

聖書日課 『からし種』 2020.2.9-2.16

<p><b>9日 (日)</b></p> <p>列王記上 7章</p>	<p>「彼らの家長として系図に登録されている」(9節)。歴代誌には、イスラエルの民の系図が記される。系図に名が記されている者の数以上に、名もなき人たちがその背後に生きていた証が見える。聖書の中に描かれる人たちの後ろに、女性たちや名もなき存在の人たちの叫びと悲しみ、喜び、そして主への信仰が脈々と今の私たちにも続いていることを覚えたい。</p>
<p><b>10日 (月)</b></p> <p>列王記上 8章</p>	<p>「僕モーセによって告げられた主の恵みの御言葉は、一つとしてむなしいものはなかった。わたしたちの神、主は…わたしたちと共にいてくださるように」(56-57節)。イスラエルの歩みを振り返る時、どんな苦難の中にも主なる神は、イスラエルと共にいてくださったことが語られる。その神が、ソロモンの時代、そして今の私たちにも伴ってくださっている。</p>
<p><b>11日 (火)</b></p> <p>列王記上 9章</p>	<p>「わたしはあなたが建てたこの神殿を聖別し、そこにわたしの名をとこしえに置く。わたしは絶えずこれに目を向け、心を寄せる」(3節)。人間が建てた建物でも、主がそれを聖別し、主は心を寄せると約束してくださる。主の神殿は建物でもあり、わたしたち自身。主の目が向けられた者として歩むことができるように祈り求めて。</p>
<p><b>12日 (水)</b></p> <p>列王記上 10章</p>	<p>「わたしは、…自分の目で見るとまでは、そのこと(ソロモンの実績と知恵)を信じてはいませんでした。しかし、わたしに知らされていたことはその半分にも及ばず…聞いていたことをはるかに超えています」(7節)。主の恵みを人から聞くよりも自分で感じた方が数倍も感動が大きい。その想像をはるかに超えた主の恵みを共に分け合って。</p>

メール配信登録メール [senfkorn.obc@gmail.com](mailto:senfkorn.obc@gmail.com)

大井バプテスト教会

メール配信希望の方は名前とアドレスを明記の上、上記のアドレスまで

聖書日課 『からし種』 2020.2.9-2.16

<p><b>13日 (木)</b></p> <p>列王記上 11章</p>	<p>「彼の心は、父ダビデの心とは異なり、自分の神、主と一つではなかった」(4節)。ソロモンは、外国から来た妻たちの文化を大切に、自分の神ではなく他の神に従っていった。気づかないうちに、イスラエルの神、自分の神と信じていた主が別の神に変わっていく人間の弱さを見る。わたしの命の主がだれなのか、見つめつつ歩みたい。</p>
<p><b>14日 (金)</b></p> <p>列王記上 12章</p>	<p>「イスラエルのすべての人々はヤロブアムが帰ったことを聞き、人を遣わして彼を共同体に招き、王としてイスラエルのすべての人々の上に立てた」(20節)。ソロモン王の死後、息子レハブアムが王として立ったが、ユダ族だけが彼に従った。それ以外の人たちは、ヤロブアムをもう一人の王として立てた。ダビデ・ソロモンの影響が、ここで立ち消えようとしている</p>
<p><b>15日 (土)</b></p> <p>列王記上 13章</p>	<p>「その人(神の人)は立ち去ったが、途中一頭の獅子に出会い、殺されてしまった」(24節)。神の言葉を欺いた結果、客人であった神の人の命が奪われることとなった。わたしたちの神、主の言葉は命への言葉。主イエスは、「わたしは・・・命である」(ヨハネ14・6)と語る。わたしたちに語り掛けられる神の言葉が、キリストの福音に照らされていることを覚えて。</p>
<p><b>16日 (日)</b></p> <p>列王記上 14章</p>	<p>「レハブアムとヤロブアムの間には戦いが絶えなかった」(30節)。ソロモンの死後、十二部族は戦いの絶えない関係に分裂してしまう。荒野の旅を共にし、約束の地を受け継ぐ恵みを共に体験した「神の民」の哀しく愚かな歴史を示される。見えない神に従うよりも、偶像を神として自らの欲望を優先する時、「人と人を共に生かす神の恵み」を失うことになるのだ。</p>